

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

ほぼ2ヶ月ぶりのかわらばん

前回のかわらばんは5月17日発行の針ノ木合宿の巻であった。一高校の山岳部顧問のたわごとなど期待している人もそれほどおるまいとは思っているものの、2002年3月にかわらばんを書き始めてほぼ2か月近い空白というのは、2011年にヤズィックアグル峰に遠征したときをおいて他にない。とにかく余裕のない状態に自分でも啞然とする。昨年は栃木の雪崩の事故のことで、一年間様々なことを勉強させてもらったが、今年はそれを受けての様々な取り組みが進行している。その取り組みの多くに参加させていただく機会を得ているが、山岳部顧問の中にも温度差があることや、すでにこのことが忘れられ始めていることに危惧をもつ。

7月7日、栃木県教育委員会に招かれて、山岳部の顧問と生徒の皆さんとともに学ぶ機会をいただいた。第1部では、顧問の皆さん対象に「高校山岳部顧問になるということとは」という題をいただいて1時間お話しした。約20名の先生方が参加され、非常に熱心に話を聞いてくださった。事故を受けて、責任の重さからこんなつらい思いをして、顧問をしなければならないのかという先生もあるやに聞いていた。また、もともと専門外の登山という種目の顧問として何をどう指導できるのかという思いもあうという。これらの思いは、ひとり栃木だけの問題ではなく、広く全国の高校山岳部顧問の共通していただく思いであることは想像に難くない。2015年にIHの出場チームを中心に全国の高校から集めたアンケートの結果でも、顧問の先生方は自分の技術の不足や経験不足を訴えていた。

表1 高校生山岳部の実態に関するアンケート調査結果（指導者分）より抜粋

回収計 44 都道府県 169 人

11. 高校と大学時代の所属クラブをお書きください。回答（山岳部とそれ以外で分類）

高校時代				大学時代			
山岳部	運動部	文化部	無所属	山岳部	運動部	文化部	無所属
27	50	43	33	22	30	37	64
16%	30%	25%	20%	13%	18%	22%	38%

表1に示したように、顧問で高校時代に山岳部員だった先生は16%、大学では13%にすぎない。高校の部活動顧問が、校務分掌上の理由である意味有無をいわせないものであるとしても、他の運動競技に比べたとき、あまりにもこの数字は低いのではないだろうか。栃木での僕の話は、それでもなぜ山岳部の顧問をしなければならないのかという点について、山岳部を志す生徒が増えているということ踏まえての山岳部員がふえているという「生徒のニーズ」と環境教育の観点がクローズアップされている現状の中での「社会のニーズ」という二つの要素をあげて説明した。もちろんそんな理屈抜きに山岳部の指導が生徒の全人的な発達を促進する素晴らしい活動であることは言うまでもないことだが、しかし「自身の力不足」や「自然のもともと持つリスクとそれに対する責任」をまじめに考えれば、山岳部の顧問などしたくないという気持ちになるのも無理か

らぬことである。しかし、だからといって、そこから目を背けていいということにはならない。自らが技術や知識を身に着け、安全教育の観点を十分に認識しながら山岳部の生徒を育てるという高い志を持ちたい。長野県では、ずっと私も所属している信濃高等学校教職員山岳会(信高山岳会)が「高校生に夢を」という旗をかかげて活動してきた。この理想に安全教育という現実をからませて、自立した登山者を育てることが我々山岳部顧問の進むべき道である。そんなことを主眼に話をさせていただいた。

第2部では、6校49名の高校生も交えて、「高校山岳部の年間活動計画をたてよう」という内容の講話をさせていただいた。逆境の中で、山岳部活動を続けようという栃木県内の山岳部の生徒のみなさんの元気な顔を見て、私自身大きな力をもらうことができた。それが終わった後、短時間ではあったが、栃木県の先生方と膝を交えてお話をする機会をいただいた。第1部の僕の話とからめながら、いずれの先生も厳しい現実の中で顧問として何をなすべきなのか悩んでおられるのがわかった。しかし、第2部の生徒の前向きな気持ちが顧問を押してくれているのだと思い、改めて高校教員の役割を考えさせられた。

ここ2ヶ月の近況を報告します

針ノ木合宿のあと、2週連続で週末は県大会の下見に入った。その甲斐あり、おかげさまで県大会では男子が優勝、女子が2位となった。6月第2週(8日から10日)は、国立登山研修所の講師研修会が行われ、そこで講師をさせていただき、全国の指導層(専門委員長クラス)にある高校の先生たちと、講習会を行う場合の安全管理について座学で学んだ。

第3週(15日から17日)は、女子の生徒と福井県で行われた北信越大会に参加。女子部員6人のうち体調を崩した1名を除いて全員を引率。会場は福井県初の敦賀半島。原発の現実を目の当たりにしながら、敦賀湾と北陸のハワイとも言われる水島を眼下に眺めての西方ヶ岳、栄螺ヶ岳の縦走は山国信州の人間にとっては経験したことのない登山。下山後のクルージングも含めて思い出に残る大会だった。谷口委員長はじめ福井県の皆さんに感謝申し上げたい。

その翌週(22日から24日)は、三重県でインターハイの拡大事務局会議。8月のIHに向けての地元と全国高体連との最終調整会議に出席。28日木曜日は県の消防学校の山岳救助隊の養成コースの講師として読図を担当。長野県では従来山岳救助は県警担当だったが、近年は消防の出番も増えてきた。そんな矢先の昨年3月県の防災ヘリが墜落。現在消防隊にはヘリがない。地上部隊としての出動要請が考えられる中での、山岳救助の基礎講習コースが新設され、その講師として招かれたというわけである。29日から7月1日は、国立登山研修所の高校指導者等安全登山技術研修会が行われ、その講師として富山へ。栃木の事故を受けて、国の紐付きで新設された研修会であるが、時期的なことや認知度不足からだろうか、やや参加数が少ないのは残念だった。しかし、その分研修生4人に講師2人という非常に手厚い対応で、参加された先生方には大好評だった。読図を中心にしながら、テント泊も組み込み、ほぼ初心者という先生から経験者まで、夏山合宿を前にして有意義な研修会になったと思う。来年度以降の参加者増を期待したい。3日から5日は台風来襲の中、全校登山の下見で東鎌から槍へ。槍ヶ岳山荘と槍が貸し切り。そして、今週末は長野県体育センターの安全講座が開催される。忙しい!!